

『キャロル』 原題 <i>Carol</i> 2015 年		執筆: 清水 純子
制作国	アメリカ	
スタッフ&キャスト (監督、脚本家、俳優、その他)	<p>スタッフ: 監督トッド・ヘインズ/ 製作エリザベス・カールセン、スティーブン・ウーリー、クリスティーン・ベイコン/ 製作総指揮テッサ・ロス/</p> <p>キャスト: ケイト・ブランシェット: キャロル・エアード/ ルーニー・マラー: テレーズ・ベリベット/ サラ・ポールソン: アビー・ゲーハード/ ジェイク・レイシー: リチャード・セムコ / カイル・チャンドラー: ハージ・エアード/</p>	
画像		
カラー・モノクロ	カラー	
時間	118 分	
ストーリー	<p>1952 年、ニューヨークのデパートの店員テレーズは、娘にクリスマス・プレゼントを買いにきたキャロルのゴージャスで妖艶な美しさに目を奪われる。置き忘れた手袋を自宅に返送したお礼に、キャロルはテレーズを食事に誘う。キャロルには、やり手の夫とかわいい娘がいるが、テレーズのういういしい美しさに心を奪われて、二人はただならぬ仲になる。キャロルの夫とテレーズの恋人は、親密な二人の女に嫌がらせをする。キャロルは娘の養育権獲得の代わりに離婚を承諾して自活する。キャロルとテレーズは様々な障害と偏見を前にして別離を覚悟するが、いったんあきらめたかのように見えたテレーズは、キャロルを追ってレストランに行く。二人の女の視線が出合い、微笑むキャロル。</p>	
時代設定	1950 年代	
場所	ニューヨーク	
社会背景	<p>フェミニズムが浸透する以前のニューヨーク、女性は結婚したら家庭に入るものとされていた。働くのは庶民階級の結婚前の女性、男性が女性を所有して養うのが当然だった時代。</p>	
文化的背景	<p>良い家庭の女性は働かず、夫や父の収入に頼って贅沢をしていた、働くのは無産階級の女性、毛皮や宝石が女性の階級と富のシンボル。同性愛はさげすまれていた時代。</p>	
使用言語	英語	
テーマ	女性同士の恋愛、世間の偏見を乗り越えて自分に正直に生きること。	

みどころ	裕福な人妻キャロルが若いデパートガールのテレーズと女性同士の禁断の愛に落ちて行く過程が美しい、女性の自立と自由、同性愛に対する偏見、男性の支配欲と嫉妬心、母と女の間で揺れる心、階級、経済力、モラルを超えた恋愛。
印象深いせりふ	RICHARD: What? You've got one hell of a crush on this woman is what...You're like a schoolgirl! THERESE: I do not - I just like her is all. I like talking with her. I'm fond of anybody I can really talk to. This stings him, and they exchange a sharp look. RICHARD: Nice. You know what I think? I think two weeks from now you'll be wishing you... She'll get tired of you and you'll wish you never- THERESE: You don't understand-! RICHARD: I do - I understand completely. You're in a trance! THERESE: I'm wide awake. I've never felt more awake. (beat) Why don't you leave me alone? ABBY: You've got some fucking nerve ordering me around. And, no. She's not here. HARGE: That's impossible. She's not home. She's not with me. She must be with you. ABBY (after a moment) : Yeah, you know, Harge, you have a point. You've spent ten years making damned sure her only point of reference is you, her only focus in life is you, your job, your friends, your family, your- HARGE: WHERE IS SHE. (beat; he composes himself) She's still my wife, Abby. I'm responsible for her. ABBY: Well, you know, that's some way of showing it, Harge - slapping her with an injunction. I'm closing the door.
授業教材用 メリット	1950年代ニューヨークの華やかなファッションと生活様式が再現、50年代ニューヨークの女性の身の振り方について考えさせる。
授業教材用 デメリット	女性同士の恋愛を普通の恋愛と同じ目線と価値観をもって描くことへの是非、50年代レズビアンへの葛藤と偏見が薄められて描かれている。
映像入手元	KADOKAWA / 角川書店
原作の有無	パトリシア・ハイスミス 『キャロル』
支持反応	metacritic 評価(批評家 95、観客 8.0) Rotten Tomatoes 評価(批評家 94、観客 73)
キーワード	ニューヨーク、女同士の恋愛、ファッション、デパート、離婚、親権、夫婦関係、女性の自立、偏見、タブー、レズビアン、自由。

Copyright © Junko Shimizu All Rights Reserved.

★本サイトに掲載される情報の著作権は、清水純子に帰属します。

許可なく複製、改変、アップロード、掲示、送信、頒布、販売、出版等を禁止します。